

日本中國學會報 第七十四集
二〇二二年十月八日 發行 拔刷

ポスト五四を生きる青年男女

——張恨水『金粉世家』と『啼笑因緣』を中心に——

林 麗 婷

ポスト五四を生きる青年男女

——張恨水『金粉世家』と『啼笑因緣』を中心に——

林麗婷

はじめに

本稿は通俗小説の大家、張恨水（一八九五～一九六七）の長編『金粉世家』と『啼笑因緣』に描かれたポスト五四の青年男女を検討しようとするものである。五四新文化運動を経て、科學と民主主義、戀愛自由といった思想が社會に廣がり、近代的な家族制度や自由戀愛の提唱が新文學の重要なテーマになった。この頃、胡適（一八九一～一九六二）がいち早く脚本『終身大事』（一九一九）を手掛け、戀愛の自由を求めて家を出た少女を描いている。本論で「ポスト五四」というのは新文化運動が低潮となった一九二〇年代半ば、特に一九二五年五・三〇事件以降のことを指す。この時期、まず政治においては國民黨と共產黨の對立が激しくなった。思想においては新派知識人の内部における矛盾が目立つようになり、傳統や新學の價値が見直されるようになる。また、文學においては「國民文學論争」が起り、左翼文學が臺頭した。このように、ポスト五四では、政治・社會・思想・文學において混沌とした局面が続くことになる。

ポスト五四の青年男女について、たとえば魯迅（一八八一～一九三

ポスト五四を生きる青年男女

六）は「傷逝」（一九二五）で男女平等を謳歌し同棲した男女の別れを描き出した^②。また、茅盾（一八九六～一九八一）は「幻滅」（一九二七）で學生運動や戀愛で失望を味わった女學生の姿を描寫した^③。さらに、丁玲（一九〇四～一九八六）は「莎菲女士的日記」（一九二八）で主人公に欲望を抱きながらも彼の卑しい人格を蔑視する、すなわち肉と靈に引き裂かれて苦しむヒロインを造形した^④。このように、男女平等、自由戀愛という新しい思想を受けつつ、青年男女が實際の生活で様々な問題に出くわし悩む様子は新文學の主要なテーマとなった。ここで指摘しておきたいのは、この三作の主人公はいずれも近代教育を受けた（受けている）男女であり、理想（戀愛や革命）のために家を出て、都市をさまよう姿が描かれていることである。

では、新文學以上に多くの讀者を有していた通俗小説では、新文學が描いた自由戀愛の問題はどのように現れたのだろうか。同じ時期、張恨水は中國傳統の章回小説を改良しながら青年男女の戀愛を描き続け、一九二四年からベストセラーを次々と世に送り出し、絶大な人氣を誇った。なかでも、『春明外史』、『金粉世家』、『啼笑因緣』はいずれも北京を舞臺とする長編小説である。

『春明外史』は一九二四年から一九二九年にかけて、北京『世界晚報』の副刊『夜光』に連載された。ジャーナリストの楊杏園と二人の女性との悲戀がメインストーリーのようだが、男女の主人公の描寫が少ないうえ、視點が分散しており、多くの登場人物のエピソードを語る群像劇的な體裁となっている。作者自身も『儒林外史』、『官場現形記』の方法⁵⁾で、社會の暗黒を暴露することに力點を置いたと述べている。また「新派」の人物の墮落を批判したり女學生が理想の戀人を語るシーンを皮肉に描寫したりしており、作者の近代に對する保守的態度が讀み取れる。

一方、一九二七年から一九三三年にかけて北京『世界日報』の副刊『明珠』に連載された『金粉世家』は、一貫して主人公の金燕西とヒロインの冷清秋との戀愛・結婚・離婚を描いて、「現代的な章回小説のモデル」を作り上げた。「人物に關する細かい描寫や、倒敘法で始まるという構造、百萬字の小説でありながら半ばオープンエンディングの結末など、いずれも章回小説の枠組みを超えて新文學作品と通じている」と評價されている。また、一九三〇年、上海『新聞報』に發表した『啼笑因緣』も若い男女の戀愛を描くものであり、「古い章回小説の枠組みと容量を突破し、中國の現代都市生活と傳統的道德心理との衝突を、張恨水の小説ならではのモチーフとして提示した」と評された。つまり、張恨水は傳統と現代の狭間に置かれた人々を描くが、その内容にしても體裁にしても、新文學作品と共通している點が多いということだ。

近年の研究でも同じような評價や分析の傾向が見られる。例えば大家族の崩壊を描く小説として、『金粉世家』はしばしば巴金の『家』と比較される。また、許子東は『啼笑因緣』と曹禺（一九一〇〜一九

九六）の『日出』（一九三六）、張愛玲（一九二〇〜一九九五）の『沉香屑 第一爐香』（一九四三）とを並べて検討し、三つの作品における女性の「墮落」の「原因」や「過程」「結果」を語るウエイトを分析したうえで、五四小説におけるヒーローによるヒロインの啓蒙という圖式を指摘した。許論文は張恨水の小説と新文學と並べて論じることの有効性を示してくれている。

しかし改めて通俗小説と新文學を比較してみると、張恨水の小説に登場する女性の多様性に氣づく。教育署長の令嬢のほか、庶民の女性や没落した家庭の女學生、召使い、妾、藝者など、様々な階層の女性を描かれている。彼女たちは新舊交代のさなかにある中國の世相を映す鏡でもある。本論では、多種多様な女性像の分析を通じて、張恨水の古典と現代に對する立ち位置を浮かび上がらせる。後述するが、張恨水は積極的に古典文學や歐米文學の資源を吸収し、傳統と近代、西洋と東洋といった二元構造を無効化しようとした。『啼笑因緣』では、學校教育と無縁な秀姑は家樹の薦めで『兒女英雄傳』を讀みふけり、自我に目覺める。『金粉世家』では、戀愛結婚に失敗した冷清秋はノラに做つて家を出るが、古典の教養によつて獨立への第一歩を踏み出す。張恨水は傳統の文化資源と近代思想を以てヒロインに息吹を吹き込んだのだ。

しかしながら、秀姑は表舞臺から姿を消し、冷清秋は貧困に喘ぐといった結末の描寫を見ると、二人のその後の境遇は寂しいものでもある。一方、家樹は麗娜と戀愛し（續編では留學に行く）、燕西は留學して映画俳優になるという結末から、男性主人公は自由氣儘に生きていることが見て取れる。つまり、張恨水の小説には、性差Ⅱジェンダーの問題が顯著に現れているのである。

レイ・チョウは鴛鴦蝴蝶派小説を考えるには「女性」が要だと説き、次のように述べている。

蝴蝶派文學は、大衆的で周縁的な地位を占めているがゆえに、パロディックな機能のすばらしい例を提供してくれる。蝴蝶派小説のうちに、センチシヨナリズムと教訓主義の狭間、感傷的なメロドラマと作者が公言する道徳的意圖の狭間で引き裂かれた物語のカラーージュを、われわれはしばしば見いだす。この不完全な断片的状態は、バランスとコントロールの効果というよりはむしろ、相互に排他的ではないまでも對立する現實（たとえば儒教と西洋化、女性の貞節と女性の解放、田舎の生活と都會の生活など）を表舞臺に引き出す効果を生み出している。そのような現實は、相互に對置されることによつて、暴力的な物語を生み出す。

レイ・チョウは蝴蝶派小説のパロディックな機能を肯定したうえで、現實における矛盾や對立を際立たせざるがゆえに、暴力的物語になりうることを指摘している。その暴力性というのは、傳統と現代、儒教と西洋化の衝突によつて生じた犠牲や悲劇を女性に負わせることである。レイ・チョウは主に初期の鴛鴦蝴蝶派作家、例えば吳趸人（一八六六～一九一〇）や、李定夷（一八九〇～一九六三）、徐枕亞（一八八九～一九三七）の作品を取り上げたが、張恨水の小説分析においても參考になる。

本稿はこのような問題意識の下、ジェンダーの視點で『金粉世家』と『啼笑因緣』を読み解きたい。特に中國古典小説（文康『兒女英雄傳』）や、外國作品（イブセン『人形の家』）、また同時代の新文學（巴金

『家』など、閒テクスト的な分析を通して、張恨水作品の女性像を多角的に捉え、張恨水文學のパロディックな機能を明らかにしたい。さらに、兩作品の主人公である樊家樹と金燕西のあり方を検討し、主人公が男性性を勝ち取る過程に生じる暴力のメカニズムを究明する。

一、女俠・關秀姑——『兒女英雄傳』から『啼笑因緣』へ

『啼笑因緣』の粗筋は次のようである。杭州出身の青年樊家樹は受験のために北京の從兄宅に寄寓し、下町の天橋で武俠の見世物師の關壽峯と知り合い、關壽峯の娘の秀姑に慕われるようになった。しかし、家樹は大鼓書を歌う少女の沈鳳喜と相思相愛の仲になり、鳳喜を女學校に通わせるなど經濟的に援助する。さらに、從兄夫婦の友人であるモダンガールの何麗娜（鳳喜と瓜二つという設定）も家樹に好感を寄せ、積極的に家樹に接近しようとしていた。ところが、家樹が歸省していた間に鳳喜は軍閥の將軍である劉德柱の繼室になり、家樹と縁を切つた。秀姑は召使いに扮装し劉宅に入りこみ、鳳喜に家樹との復縁を働きかける。しかし鳳喜は劉德柱に虐待され、發狂してしまう。劉德柱に求婚された秀姑は劉の計略の裏をかき、父と共に劉を暗殺し、「繰り返し女性を蹂躪し、ついにわが身に迫つた」劉を殺したというメッセージを残して北京から姿を消した。しばらく経つたころ、家樹が匪賊に拉致されたことを知つた二人は再び家樹を救うために現れる。さらに、秀姑は家樹を麗娜と再會させ、二人の戀愛を成就させるために獻身したのだつた。

これまでの研究は、主にヒロインの沈鳳喜に注目してきた。阪本ちづみは鳳喜が狂つたのは「金に走つた罰としての狂氣」だと指摘して

いる。また、許子東は鳳喜の「墮落」について、『啼笑因緣』は下層の女性の道德の缺陷を浮き彫りにし、小市民の虚榮の夢を満たしながらそれを諷めた⁽¹²⁾としてゐる。

しかし、鳳喜を助けたり、家樹を救ったり、家樹と麗娜の戀愛を成就させたりするなど、秀姑こそが『啼笑因緣』で最初から最後まで主體的に行動し、物語を推し進めた人物と言つても過言ではない。『啼笑因緣』を読み解くには、秀姑の人物造形を分析する必要がある。張恨水は『新聞報』の編集者の嚴獨鶴（一八八九—一九六八）に「小説に武俠の要素を入れてほしい」と要請されて、關壽峯父娘を造形したと述べた。従來の研究で秀姑のあり方が見過ごされてきたのはそのためかもしれない。

秀姑については、清末の小説『兒女英雄傳』のヒロイン十三妹との關連性を抜きには語れない。語り手は秀姑を語るときにしばしば十三妹に言及しているからだ。第四回で、家樹は秀姑が「劉香女⁽¹³⁾」を讀んでいるのを見て、「君が讀んでいたあの本はあまり面白くないです。きつと武俠が好きなんでしょう、明日いい本を持つてきましょう⁽¹⁴⁾」といい、翌日秀姑に『兒女英雄傳』を渡す。

『兒女英雄傳』は文康による白話小説である。ヒロイン十三妹の父は冤罪で獄死し、彼女は鄧九公という俠客のもとに身を寄せている。ある日十三妹は偶然に讀書人の安驥を盜賊から救い、さらに安を田舎娘の張金鳳と結婚させる。その後、十三妹が父の仇を取るために出發しようとしたとき、安驥の父である進士の安學海が現れ、十三妹を説得して息子に嫁がせた。かつての女俠は士大夫の側室になるという結末である。

秀姑は『兒女英雄傳』を熱心に讀みつつ、「もしかしたら彼の家に

はすでに張金鳳（つまり正妻）がいるから、わざとこのような本を私に讀ませるのかしら⁽¹⁵⁾」と家樹の意圖を探った。『兒女英雄傳』を讀み終えた後、秀姑はさらに家樹に面白い本があるかと聞き、『紅樓夢』を貸してもらう。秀姑が夢中で讀んでいるのを見た病院の看護師は、「わかつたわ、あの人（家樹）はあなたの賈寶玉でしょう⁽¹⁶⁾」と秀姑をからかった。しかし、間もなく秀姑は家樹が鳳喜と戀愛していることを知り、『紅樓夢』の夢から覺めるのである。

小説の後半では、秀姑は劉德柱に虐待された鳳喜を助けたり、家樹が鳳喜と復縁しよう奔走したりする。このような秀姑に對して、家樹は「秀姑の立場はもちろん十三妹とは異なるが、彼女の（僕に對する）好意は十三妹が安公子や張姑娘に向けたものに勝るとも劣らないものだ⁽¹⁷⁾」と心を打たれている。

武術に長け、正義感が強い秀姑は確かに十三妹を彷彿とさせる。悪人劉德柱を討ち、家樹と麗娜の戀愛を成就させようとしたのは、安驥と張金鳳の仲人を取り持った十三妹に自分を重ねているためだろう。つまり、秀姑は十三妹を模倣しているのである。しかもともと官僚の令嬢で教養が高かった十三妹と比べ、秀姑は下層の庶民の出身で、小説ぐらゐは讀めるものの、才女からは程遠い。秀姑に十三妹のような女性の存在を知らせたのは家樹である。

また家樹は麗娜と劇場で『兒女英雄傳』の一段である演目『能仁寺』を見ながら十三妹の結婚について議論し、次のように述べる。

「世の中には十全なものはない。この十三妹は『能仁寺』の一幕では實にはつらつとしてゐる。惜しむべきことに『兒女英雄傳』の作者は無理に十三妹を安龍媒に嫁がせて、安の第二夫人にして

しまった。」⁽¹⁹⁾

家樹は十三妹の結婚について否定的な感想を漏らした。つまり、颯爽とした十三妹が妾になって家庭に圍い込まれたことを惜しんだのである。

ところで、家樹は鳳喜と戀に落ちたものの、秀姑の腕を見て現代女性の筋肉の美を感じるなど、時々秀姑にエロティックな視線を投げかけている。つまり、秀姑を戀愛の対象から排除していない。鳳喜への思いを諦めたあと、家樹は秀姑と麗娜の二人の間で悩むようになる。

一方、秀姑は麗娜から家樹の十三妹の結婚についての否定的な感想を知らされ、十三妹とは異なる道、すなわち結婚しないことを選んだ。小説の最後で秀姑は「何小姐から聞きましたが、あなたは十三妹の後半（の生き方）に賛成しないんですってね。あなたは優しいし、見識もありません。これ（秀姑の寫眞）を記念になさつて下さい」とメッセージを残し、家樹から離れた。

秀姑は傳統的な佳人でも現代の新女性でもない。家樹と公園で散歩することを夢見る一面もあれば、劉徳柱を暗殺して壁に血書を残し、家樹を驚かせる一面もある。この暗殺は秀姑の十三妹に對する極端な模倣であり、十三妹の女俠氣質を現代に受け継いだものである。血書は劉徳柱を暗殺した経緯を説明した内容で、「不平女士」と署名されていた。ここでは、社會に自分のメッセージを送る自己主張をしたという秀姑の願望が読み取れる。

以上からわかるように、張恨水は意圖的に十三妹と重ねて秀姑を描いた。また、張恨水は『啼笑因縁』を書き終えた後、「秀姑を登場させる前から、彼女を誰とも結婚させまいと決めていた」と述べている。⁽²⁰⁾

さらに、『啼笑因縁』の主人公のその後について、張恨水は「關秀姑の行方はこれ以降も明かさない。もし讀者の皆さんが彼女に歸つてほしいとお考えでしたらご想像にお任せする。ただ絶対に女俠の潔白を汚さないでほしい」と強調した。ここからは、戀愛結婚は女俠の潔白を損なうという考え方が窺われる。張恨水は秀姑に女俠という身分を與え、結婚しなくていいという女性のあり方を提示した。いや、むしろ結婚してはならない女性を造形したのである。

家樹と秀姑の關係は啓蒙者と被啓蒙者という圖式で理解できるが、家樹は十三妹の結婚に否定的な感想を持ちつつも現實の秀姑にエロティックなまなざしを投げかけており、啓蒙者の男性が被啓蒙者の女性に向けた欲望はむき出しのままである。この關係は新文學における啓蒙者物語に對するパロディといえよう。一方、秀姑はそうしたメロドラマから脱却する可能性を見せた。張恨水は『兒女英雄傳』のパロディによつて舊・新の間を生きる女性に結婚以外の選擇肢を示したのである。

自らの手で悪人を裁く秀姑は正義感に満ちているものの、近代社會にとつては不穩な存在でもあり、家樹からもその行動は忌避されて物語から姿を消した。また、續編（三友書社、一九三三）では義勇軍に參加し抗日のために命を捧げ、愛國のイデオロギーに回収されてしまうのである。

二、家出する女性たち——『金粉世家』における ノラの影

『啼笑因縁』は未婚の男女をめぐる物語だが、『金粉世家』は夫婦關係の破綻を描く。女學校に通い、斷髪し、ファッションを好むヒロイ

ンの冷清秋は民國期の典型的な新女性といえよう。しかし、女學校に通いながらも清秋は古詩文に長けている傳統的な才女でもある。濱田麻矢は清秋の造形について、作者の意圖は「彼女に「おとなしい女學生」という慎み深くかつモダンな身分を與えることだけにある」と指摘している。

清秋は國務總理の末息子金燕西と自由戀愛を経て結婚したものの、幸せな日々は長く續かなかつた。燕西は「社交公開」を口實に藝者と遊ぶなどの道樂に耽る。家長の金銓が亡くなると金家は分家し、燕西の金遣いはますます荒くなつた。清秋と燕西は度重なる喧嘩の末別居する。ある日の火事ののち清秋は乳兒を抱えて行方不明になるが、しばらく経つと金家に手紙を送り、離婚の意思を表明した。すでに黃芳が指摘した通り、清秋の行動はノラの家出と相通じるものがある。²⁴⁾

五四以降の新文學には、自由戀愛をテーマとする小説が多い。しかし、そのほとんどは青年男女が自由戀愛のために古い家庭と決裂することに焦點化されており、戀愛結婚の失敗を描くものはさほど多くない。その意味で、張恨水が清秋に離婚の選擇肢を與えたことは注目すべきである。

一九一五年、中華民國は『民法』で公民の離婚の權利を定め、「協議離婚」と「判決離婚」が可能になつた。『金粉世家』では、清秋に歸宅が遅いと責められた燕西が「なんだ？ 僕がおまえを壓迫していると言うのか！ なら自由にしてあげよう。離婚すればいいじゃないか」と答えており、最初は燕西から離婚を切り出しているが、ここで清秋は初めて「離婚」という言葉を聞いたのだ。

その後清秋は自分が物質的な豊かさや虚榮心に負けて燕西と結婚したことを後悔した。小説では次のように清秋の心理を描いている。

わたしの能力なら自立することができるのに、どうしてこんなに輕視されなければいけないの。あの人の機嫌が悪いときは氣に食わないやつと思われし、機嫌がいいときだつてあの人のおもちやに過ぎない。二人の仲が良いにしろ悪いにしろ、女性が富貴の子弟の妻や妾なんかになると、人格が全く失われてしまう。彼女が次から次へとそうしたことを考えると血が熱く沸き上り、「離婚だ」、「離婚だ」と心から大きな聲が彼女に告げているようだった。²⁵⁾

こうして、清秋は不幸な結婚から抜け出し、自立したいと考えるようになる。「離婚だ」「離婚だ」という清秋の心の叫びは、物語全體で最も強烈な感情として描かれている。イブセン『人形の家』が一九一八年に『新青年』に掲載されて以來、新文學において女性の家出が描かれるようになった。清秋が自分は夫のおもちやに過ぎないと認識し、最終的に家を出るのはまさにノラと重ねて描かれたものだと見える。

しかしながら、離婚を選んだ清秋のそのあとの境遇は慘めなものとして語られる。小説の冒頭で示されたように、清秋は路上で對聯を書く筆耕で口を糊する。陳千里はこの冒頭部分から、『儒林外史』に登場する才女沈瓊枝との類似性を見出している。²⁶⁾しかし、結婚詐欺に遭つて不本意に妾にさせられた沈瓊枝が、縣長官の前で婚家を痛烈に批判し、婚約の解除に成功したのに比べると、清秋は手紙で金家に離婚の意思を表明したものの、燕西と再び對面することもせず、正式な離婚の手續きも取らなかつた。筆耕は清秋が自立する手段というより、センチメンタルな雰囲気醸し出しており、張恨水は女性が自由戀愛

に失敗したらひどい目に遭うということを讀者に示したのだ。

ところで、『金粉世家』で家出した女は清秋だけではない。金家の長男、鳳舉の嫁である吳佩芳には、小憐という侍女がいた。その小憐は洋行歸りの柳春江と駆け落ちをする。巴金の『家』で女中の鳴鳳が妾になることを拒否して自殺に至ったのはよく知られているが、小憐は好色な鳳舉の露骨な言動から身を守りながら柳春江と文通をし、ついに金家から逃げ出した。小説の後半で小憐夫婦は金家を訪れるが、佩芳は息子に小憐を「おばさん」と呼ばせている。昔の主僕は姉妹のような關係になったのである。

小憐の戀愛は成功例として描かれている。柳と大膽に文通をし、冷靜沈着に家出を計畫した小憐は、鳴鳳とは異なり自力で幸せを手にした。ただ、近代教育を受けていた金家の娘たちが小憐の戀愛を間接的に推し進めたことも忘れてはいけぬ。金家の五女の敏之と六女の潤之はそれぞれアメリカとフランスに留學した新女性であり、八女の梅麗は女學校に通っている。小憐と柳の出会い、佩芳の代わりに小憐が令嬢に扮装して結婚式に参加したことがきっかけだった。柳が小憐との再會を望んで金家の娘たちを會食に誘ったとき、姉妹三人は鳳舉の意に沿わないであろうことを承知しながら小憐を連れていったのである。

傳統的な才子佳人小説では侍女は佳人と才子の仲立ちをするが、小憐の場合は令嬢が侍女と才子の戀愛を助けているのは注意に値する。張恨水はありふれた才子佳人の話の構造を轉倒させて、侍女の家出を描き出した。しかし一方で、張恨水は女性の幸せは結婚によってしか實現できないという考えを露呈させている。また、一見幸せそうに見える小憐も將來清秋と同じ轍を踏む可能性は否定できない。

魯迅は一九二三年に北京で行った講演「ノラは家出してからどうなったか」の中で、ノラは家を出たが、結局は墮落するか歸るかしかないと述べたうえで、それを避けるためには、お金——經濟權が最も重要だと説いた。張恨水が家出をした女性に用意した道も結婚か、貧困かという二擇で、ある意味では魯迅の豫言通りと言える。しかし、魯迅が女性の經濟權の重要性を強調したのと異なり、張恨水は女性が稼ぐことを良しとしないようだ。それは小説の中で金儲けをしようとすゝる金家の嫁たちを冷笑的に描いたり、金銓の妾である翠姨が金家の財貨を巻き上げて逃げたことを風刺したりしていることからわかる。そもそも張恨水は女性が働く、女性が自立できるという可能性に思い至らなかつたようである。『金粉世家』において、留學した金家の娘たちが侍女と才子の戀愛を成就させたことは前述の通りだが、それ以上社會に進出して何かをするには期待されていなかった。小説の最後で、五女と六女が結婚のために再びヨーロッパに行く。彼女たちを待ち受けるのはやはり結婚にほかならないのだ。

三、出國する男性——文武を超えた新たな男性性

『啼笑因緣』と『金粉世家』で、結婚しない道を選ぶ女性や、家出した女性が描かれたことは前述したとおりだ。張恨水は傳統と近代の境界線を攪亂しながら古典文學や近代文學のパロディを作つて見せた。しかし秀姑は表舞臺から消え、清秋は寂しく隱居するという設定からは、ヒロインの行き詰まりを感じざるを得ない。それに對して、小説の男性主人公には開かれた人生が用意されている。このような書き方を男性性の問題に絡めて分析してみたい。

『春明外史』と『啼笑因緣』の主人公はいずれも江南地方から北京

に上京したという設定であるが、そこには作者である張恨水の経験が反映されている。特に前者の、新聞記者をしながら詩文の創作に没頭する楊杏園は、初期の張恨水の自画像といえよう。ただし主人公は獨身の設定である。また、妓女の梨雲との出會いから死別に至るまでの物語は、清末の妓樓文學と通じるところがある。楊杏園は二度目の戀愛に挫折して意氣消沈し、佛教に歸依したが、失意のうちに病死する。佛教は主人公が現實から目をそらすために用いられている。それは『啼笑因緣』の秀姑が失戀して『金剛經』を読みふけたのや、『金粉世家』の金夫人が西山に隱遁し佛道修行に勵んだのと同様の意味を持つだろう。

楊杏園のような舊式の文人は死を迎える以外に道がなかった。一方、新しい青年を張恨水はどのように描いているのだろうか。大學受験のために北京にやってきた家樹は新しい青年になることを目指しているといえよう。彼はもはや、楊杏園のように詩詞を作ったりしない。作品内では彼の受験勉強についてはほとんど觸れられず、代わりに家樹が武術に興味を示していることが語られている。

家樹が(南の)學校にいたとき、武術を教える教員がいたので、これ(武術)にいささかの興味を持っていた。現在このようなクラブに出會い、多くの武術を見學できてとても喜んだ。³⁰⁾

高嶋航は近代中國の男性性を論じ、傳統中國では男性性として「文」が霸權を有していたものの、日清戦争や清朝の滅亡、さらに中華民國の誕生および五四運動を経て、文武の相克と文の失墜が見られたことを指摘している。例えば『新青年』は武を提唱し、中國の再男

性化を圖つたという。家樹の武術に對する關心もこの文脈で理解できよう。しかし、「中國には、國民黨、共產黨、軍閥など複数の權力が竝立し、それぞれに異なる男性性を主張していた」³²⁾ように、家樹の男性性も曖昧で、傳統的な文人趣味から完全には抜け出ていない。準大學生の家樹は從兄夫婦が頻りに足を運ぶダンスホールに興味を示さず、鳳喜と『四季相思』、『黛玉悲秋』などの傳統藝能を嗜み、才子佳人の夢を思い描く。一方、モダンガールの何麗娜に映畫館に誘われると斷り切れず、二人の女性の間で揺れ動く。

北京に來た家樹は新しい學問、新しい思想を求めたが、それだけでなく、新しい家庭のスタイルを目にするようになった。滞在先の從兄、陶伯和の兩親は領事として外國に駐在しているため、家には若い夫婦と二人の子供がいて、そこに召使いが付き添っている。まさに近代中國が提唱した小家庭そのものだ。「普段は夕食の後、陶夫人は急いで身だしなみを整えはじめた。北京飯店へダンスに行くにしろ、眞光や平安の映畫館で映畫を見るにしろ、そろそろ時間になるからだ」³³⁾といった生活ぶりである。

家樹は從兄夫婦と一緒にダンスホールに出入りする姿から二人の圓満な仲を見て取るが、このような小家庭を維持するには強い經濟力が求められることに氣づいた。作中には陶夫人のダンスシューズをめぐる議論があり、それが三、四〇元もすると知つた家樹は驚く。³⁴⁾さらに北京飯店を去る際、麗娜がウェイターに二元のチップを渡すのを目にした家樹は大きなショックを覚え、「彼女は、まるで銀貨を銅貨のように使うじゃないか。彼女の夫になる男は、このような費用を容易く出してやれるのだろうか」³⁵⁾と考える。麗娜は凝つた衣服をまとうほか、花を買うなどモダンな生活を享受している。ウェイターにチップを渡

すのも彼女の洗練されたふるまいであるが、家樹は單なる浪費だと理解する。麗娜も家樹の氣持ちを配慮し、その後簡素な身なりをし、シンプルな生活をするように描かれている。

清末以降、近代の家族制度が提唱されたが、江上幸子は「男は外、女は内」という中國の傳統的な性別役割規範の改變には至っていない⁽³⁶⁾と指摘している。麗娜の浪費ぶりに納得できない家樹は男女の性別役割規範を内面化し、焦慮を覚える一人である。父はすでに亡くなつており、少し遺産があるとはいえ、家樹は一受験生に過ぎず、將來はいまだ明らかではない。鳳喜との交際では彼は彼女の援助者であり、道徳的にも優位に立つていて男性性を保っている。一方、鳳喜と瓜二つの麗娜は、「社交場に入りに慣れていて、世故に長けている」、「ひよつとしたら男性を弄ぶんじゃないか」と家樹の目には映る。家樹が最も氣になるのは、麗娜の家庭が家樹より裕福で社會的地位が高いことであつた。鳳喜が金錢の誘惑に負けて劉徳柱の繼室になつたことを知らされて、家樹は大きなショックを受ける。しかし麗娜に悩みを聞かれた家樹は、「どうして麗娜に助けてもらえようか。彼女は確かに好意を示してくれたが、彼女の上流階級の振る舞いには同調できるものか」と考えた。つまり、鳳喜が金錢のために自分のそばを離れたという事實を、自分より裕福な麗娜に知られたくないという意識が働いているのである。

さらに小説の後半では、家樹の叔父が昇進を目當てに家樹と麗娜の結婚を望んでいることが描かれるが、家樹は「彼(叔父)と何小姐の父親である何廉とは官界で協力關係があり、自分の結婚は添え物に過ぎない」という認識に至つた。プライドを傷つけられた家樹はその後麗娜に會い、結婚できないことを婉曲に伝える。

では家樹の男性性はどのようにして回復されるのだろうか。小説の最後で、秀姑の仲介で家樹は麗娜と再會したものの、二人の關係は曖昧なままだつた。一九三三年に書かれた續編では、家樹は麗娜と共に留學している。ドイツで化學の勉強をした家樹は今度こそ文人趣味から脱け出した。抗日活動に参加するために歸國し、化學軍用品製造場を建てようとするが、資金の問題にぶつかると、そこで麗娜は父親に寄付を求めた。これに對して家樹は、「君はこのように僕を支えてくれた、どうやって君に報いることができるだろう」と感激している。麗娜は「あなたがお嬢さんぶりを嫌がるのがなかつたら私はいまだにダンスやグルメの生活から抜け出せず人間の道理を知ることではなかつた。あなたこそ私を導いてくれたんだわ」と答えた。ここでは、麗娜がジェンダー規範(家樹が望んでいる女性のありかた)に則つた姿が際立っている。家樹は、「愛國」を介することで、麗娜の財力を受け入れることができたのではなく、男性性の危機を解消したのだと理解できよう。

一方、『金粉世家』の燕西も詩文の創作能力に缺けるといふ設定である。彼は清秋に接近しようとして詩社を結成したが、詩文はすべて清秋の叔父が代作していた。つまり、燕西は最初から傳統的文人の男性性を代表する「文」を有していなかつたのだ。逆に古典の教養が深い清秋は優れた詩文によつて金銓に認められる。燕西自身も清秋に「君が僕の國語教師であることはこの家でみんな知っている」と述べている。學校に行かない燕西は近代的知識も學んでいない。それもあり、國務總理の父が亡くなると生活は破綻の危機に瀕する。清秋に「小家庭一年目豫算表」を渡された燕西は「お前は僕が絶対にお金を稼ぐことができないと思つているね。いくら僕が稼げなくても、お前

がしやしやり出て僕の家をいよいよにするには及ばないよ⁽¹³⁾」と態度を豹變させた。

燕西がこのような難局から抜け出せたのはやはり出國によつてである。小説の終盤で燕西はドイツに留學し、映畫という新しい表現の方法を身につけた。歸國後、彼は清秋との戀愛を繰り返し映畫にし、自ら主役として出演した。ただし、この主役は愛のために艱難辛苦を乗り越える男性として表現されており、それに對してヒロインは、夫を理解せず、ヒステリーのあまり家に放火してしまふような女性として造形されている。燕西は傳統的な詩文を作れない非文人だが、西洋映畫の知識と技術を獲得して新しい「自己」を演出し、多くの女性の同情を得て男性性を勝ち取つたのだ。一方、清秋は詩文を書き續けたが、誰にも見られないように引越しの前にノートを燃やした。傳統的な詩文は現代的な映畫に敗北したのである。清秋は燕西の映畫を見ながら涙を流した。二人の戀愛の失敗を公に語るようになった燕西は、その語りによつて弱い清秋をさらに窮地に追い込む。近代の青年が男性性を築く過程は女性にとつて暴力的であることを、『金粉世家』は示している。

終わりに

以上、張恨水の『啼笑因緣』と『金粉世家』を取り上げて通俗小説におけるポスト五四の青年男女のあり方を考察してきた。まず、『啼笑因緣』の閑テクストとして『兒女英雄傳』に注目し、そのヒロインの十三妹と秀姑との共通點と差異を分析し、秀姑が十三妹の女俠氣質を繼承しながらも結婚の道を歩まず、近代女性（續編では愛國女性）に變貌するありさまを考察した。また、張恨水が啓蒙者の男性の被啓蒙

者の女性に向ける欲望を巧みに表現し、新文學における啓蒙者物語のパロディを作つたことを論じた。

續いて、『金粉世家』における家出女性の行方について、特に女學生であつた清秋と侍女の小憐に注目して検討した。張恨水はノラと重ねて清秋を描き出したが、その造形は感傷的なものであつたことが明らかになつた。そして、傳統的な「才子佳人」物語がすり替えられて小憐の家出が描かれたことに着目し、近代教育を受けた金家の娘たちが侍女の戀愛を助けたことを指摘した。しかし、幸せな結婚をした小憐がいつかもう一人の清秋になる可能性も見過ごせない。また、金家の娘もいずれは結婚するほかにように描かれている。張恨水は様々な階層の女性を描き出したものの、最終的には傳統的な性別規範から抜け出るものではなかつたのだ。

さらに、近代以降に中國の男性が抱えた「文」「武」の問題と、兩作品における男性主人公の行動との關係を分析した。それは家樹と燕西が出國（留學）によつて傳統的な「文」と切り離され、男性性を勝ち取り、現代青年に脱皮してゆく過程であつたと考えられる。その過程で麗娜はジェンダー規範に則り、清秋は眞實を語ることでできなくなる。中國が傳統から近代にシフトする過程に生じた男女の不均衡、不平等といった問題を張恨水文學は鮮やかに提示したのである。

注

- (一) ポスト五四という概念については、章清「一九二〇年代…思想界の分裂與中國社會的重组—對『新青年』同人（後五四時期）思想文化的追跡」（『近代史研究』二〇〇四年第六期）、羅志田「體相和個性…以五四爲標識的新文化運動再認識」（『近代史研究』二〇一七年第三期）などを

参照した。

- (2) 魯迅「傷逝」(『彷徨』所收、北新書局、一九二六年)。
- (3) 茅盾「幻滅」(『蝕』所收、上海開明書店、一九三〇年)。
- (4) 丁玲「莎菲女士的日記」(『小説月報』第一九卷第二期、一九二八年二月)。
- (5) 張恨水『我的寫作生涯』(四川人民出版社、一九八一年)三三頁。
- (6) 錢理群、溫儒敏他編『中國現代文學三十年(修訂本)』(北京大學出版社、二〇一六年)二九二—二九三頁。引用箇所は吳福輝が執筆。「至於書中人物描寫的細緻入微，由倒敘開頭的結構，百萬字小說的結尾呈半開放式的狀態，都超出了一般章回小說的格局，而與新文學作品打通了。」
- (7) 錢理群、溫儒敏他編『中國現代文學三十年(修訂本)』、引用箇所は吳福輝が執筆。二九三頁、「脹破了舊章回小說的框架容量，提出張恨水小說特有的中國現代都市生活與傳統道德心理相互衝突的主題。」
- (8) 例えば、袁進『張恨水評傳』(湖南文藝出版社、一九八八年)、陳千里『因性而別——中國現代文學家庭書寫新論——』(南開大學出版社、二〇一三年)。
- (9) 許子東「一個故事的三種講法…重讀『日出』、『啼笑因緣』和『第一爐香』」(『許子東講稿卷二：張愛玲 郁達夫 香港文學』所收、人民文學出版社、二〇一一年)四〇—六〇頁を参照。
- (10) レイ・チョウ著『女性と中國のモダニティ』(田村加代子譯、みすず書房、二〇〇三年)一一—一二頁。
- (11) 阪本ちづみ『張恨水の時空間——中國近現代大衆小説研究』(勉誠出版、二〇一九年)一〇四頁。
- (12) 許子東「一個故事的三種講法…重讀『日出』、『啼笑因緣』和『第一爐香』、四六頁、『啼笑因緣』突出下層女子的道德缺點，所以既滿足也勸誡了小市民的虛榮夢。」
- (13) 張恨水『我的寫作生涯』、四五頁。
- (14) 寶卷(明清時代に流行した宗教藝術の臺本)の演目の一つ。宋の時代の劉香女という女性が佛道修行に勵んだ話であり、寶卷における女人求道物の代表作の一つである。澤田瑞穂「増補 寶卷の研究」(國書刊行會、一九七五年)一五五—一五六頁を参照。
- (15) 本文引用は張恨水『啼笑因緣』(人民文學出版社、二〇一八年)以下は頁數のみを示す。五三頁、「大姑娘看的那個書，沒多大意思。你大概是喜歡武俠的，我明天送一部很好的書給你看看吧。」
- (16) 張恨水『啼笑因緣』、五三頁、「莫非他家裡原是有個張金鳳，故意把這種書給我看嗎？」
- (17) 張恨水『啼笑因緣』、五八頁、「我明白了，那就是你的賈寶玉吧！」
- (18) 張恨水『啼笑因緣』、二六七頁、「秀姑的立場，固然不像十三妹，可是她一番熱心，勝於十三妹待安公子、張姑娘了。」
- (19) 張恨水『啼笑因緣』、二六六頁、「天下事哪能十全！這個十三妹，在『能仁寺』這一幕，實在是個生龍活虎。可惜作『兒女英雄傳』的人，硬把她嫁給了安龍媒，結果是作了一個當家二奶奶。」
- (20) 張恨水『啼笑因緣』、三二〇頁、「何小姐說，你不贊成後半截的十三妹。你的良心好，眼光也好，留此作個紀念吧！」
- (21) 張恨水「作完『啼笑因緣』後的說話」(張占國、魏守忠編『中國現代文學史料匯編 張恨水研究資料』天津人民出版社、一九八六年)二四三頁。
- (22) 張恨水「作完『啼笑因緣』後的說話」、二四五—二四六頁。
- (23) 濱田麻矢「少女中國——書かれた女學生と書く女學生の百年」(岩波書店、二〇二一年)八八頁。
- (24) 黃芳「娜拉的出走…對冷清秋悲劇命運的思考」(『電影文學』第二〇期、二〇〇七年)八二—八三頁。

- (25) 本文引用は張恨水『金粉世家下』（人民文學出版社、二〇一八年）、以下は頁數のみを示す。一〇〇五頁、「怎麼著？你說我壓迫你了嗎？這很容易，我給你自由，我們離婚就是了。」
- (26) 張恨水『金粉世家下』、一〇七五頁、「憑我這點能耐，我可以自立，爲什麼受人家這種藐視？人家不高興，看你是個討厭蟲，高興呢，也不過是一個玩物罷了。無論感情好不好，一個女子做了紈袴子弟的妻妾，便是人格喪盡。她一層想著逼近一層，不覺熱血沸騰起來。心裡好像在大聲疾呼地告訴她，離婚，離婚！」
- (27) 陳千里『因性而別——中國現代文學家庭書寫新論』南開大學出版社、二〇一三年）一一三—一四頁。
- (28) 巴金『巴金選集一：家』（四川人民出版社、一九九六年）。
- (29) 竹內好編譯『魯迅評論集』（岩波書店、一九八一年）一三九—一五〇頁。
- (30) 張恨水『啼笑因緣』、六頁、「家樹在學校裡，本有一個武術教員教練武術，向來對此感到有些趣味，現在遇到這樣的俱樂部，有不少的武術可以參觀，很是歡喜。」
- (31) 高嶋航「近代中國の男性性」（小浜正子、下倉涉他編『中國ジェンダー史研究入門』所收、京都大學學術出版會、二〇一八年）二五九—二七九頁。
- (32) 高嶋航「近代中國の男性性」、二七六頁。
- (33) 張恨水『啼笑因緣』、一八頁、「平常吃過了晚飯，陶太太就開始去忙著修飾的，因爲上北京飯店跳舞，或者到眞光、平安兩電影院去看電影，都是這時候開始了。」
- (34) 陳明遠『文化人與錢』（百花文藝出版社、二〇〇〇年、三五頁）の研究によれば、一九二〇年代の北京では、四人家族の一ヶ月の食費は一二元程度であった。
- (35) 張恨水『啼笑因緣』、二三頁、「像她這樣用錢，簡直是把大洋錢看作大銅子。若是一個人作了她的丈夫，這種費用，容易供給嗎？」
- (36) 江上幸子「近代中國の家族および愛・性をめぐる議論」（小浜正子、下倉涉他編『中國ジェンダー史研究入門』所收、京都大學學術出版會、二〇一八年）二八四頁。
- (37) 張恨水『啼笑因緣』、一九九頁、「交際場中出入慣了，世故深沉」、「不好呢，男子就會讓她玩弄於股掌之上。」
- (38) 張恨水『啼笑因緣』、二〇六頁、「我的事，如何能要麗娜幫忙？她對於我總算很有好感，可是她的富貴氣逼人，不能成爲同調的。」
- (39) 張恨水『啼笑因緣』、二七七頁、「他和何小姐的父親何廉在官場上有點合作，自己的婚事，還是陪筆。」
- (40) 張恨水『啼笑因緣』續集』（初刊は三友書社、一九三三年、引用は北京出版社、一九八一年）四六六頁、「你這樣成就我，我怎樣報答你呢。」
- (41) 張恨水『啼笑因緣』續集』、四六六頁、「假使你當年不嫌我是個千金小姐，我如今還沉醉在歌舞酒食的場合，哪裡知道眞正做人的道理！其實還是你成就了我呢。」
- (42) 張恨水『金粉世家上』、五六一頁、「你是我的國文教習，這一件事，我家裡都傳得很普遍了。」
- (43) 張恨水『金粉世家下』、一〇二一頁、「你是料定我沒有本事弄錢的。我縱然弄不到錢，我的家也用不著你操心來支配！」
- 〔付記〕本稿は二〇二一年一〇月一〇日の日本中國學會第七十三回大會パネルディスカッションで発表した内容に基づき修正を加えたものである。なお、本研究はJSPS科研費20F20005の助成を受けたものである。